



編集・発行

大阪府立 呼吸器・アレルギー医療センター  
大阪府羽曳野市はびきの3丁目7-1

TEL: 072-957-2121

FAX: 072-958-3291

HP: <http://www.ra.opho.jp>

E-mail: [kokyucen@ra.opho.jp](mailto:kokyucen@ra.opho.jp)



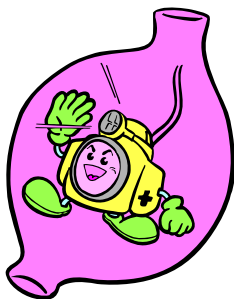
## ピロリ菌の話題

感染症センター長

まつもと  
松本

ともしげ  
智成

感染が原因の悪性腫瘍といえば肝がんが有名です。最近では、胃がんも立派な「感染症」が原因とも言われています。



原因菌は、ヘリコバクター・ピロリ菌（以下、ピロリ菌）です。ピロリ菌は、1983年にオーストラリアのロビン・ウォレンとバリー・マーシャルによって発見されました。そして、その発見により、ロビン・ウォレンとバリー・マーシャルに対して2005年にノーベル生理学賞が授与されました。日本国内の感染者数は約6000万人で、上下水道が完備される以前に育った世代に多く、現・中高年層の半数～7割が感染しているといわれます。逆に今の10代の感染率は1割にも満たないです。

胃炎や胃・十二指腸潰瘍の原因菌であることが証明されているピロリ菌ですが、胃がんとの関連については長らく議論されてきました。その論争に一石を投じたのは2008年に浅香正博氏（北海道大学病院長）らが行った日本から発表された臨床試験です。内視鏡治療を受けた早期胃がんの患者をピロリ菌の除菌を行うグループと除菌をしないグループに分け、3年間の経過観察を行ったところ除菌グループでは胃がんの再発率が3分の1に激減しました。

これを受けて09年に改訂された日本のピロリ菌感染の診療ガイドラインでは「ピロリ菌感染症」という疾患概念が新たに提唱されました。さらにピロリ菌感染者は胃・十二指腸潰瘍の治療のみならず、胃がんや胃がんの発生源母地となる萎縮性胃炎など、ピロリ菌に起因する疾患の予防を目的とした除菌治療が推奨されています。胃部不快感のあるみなさんは、一度、主治医の先生と相談してピロリ菌の検査をしてみましょう。

## ステロイド軟膏の正しい塗り方

皮膚科主任部長

かたおか  
片岡

ようこ  
葉子

アトピー性皮膚炎はかゆみの強い皮膚の病気で、体質が関係しているためになおりにくいとされています。上手に治療すれば、体質はあっても、ほとんど症状なく、快適にすごすことはできるのですが、“治療しているのによくなる、だんだんひどくなってきている”と、こまっている患者さんがたくさんおられます。アトピー性皮膚炎を克服するためのポイントのうち、今回は、ぬりぐすりの使い方について考えて見ましょう。

皮膚の炎症を鎮め、正常化するために最もよく使われる薬は、ステロイドの軟膏です。薬をぬるとき、どんな塗り方をしているでしょうか。ごくごく薄くつけていませんか？特にひどいところだけでもぐらたたきのようにぬっていませんか？これでは、野原の大火事を消すのに、火の勢いの強いところだけに、水鉄砲で水をかけてまわっているようなものです。火事はひろがってしまいます。完全に火が消えるまで初期消火を続けて、残り火がないのを確認して終了すれば、大火事でも消すことができます。

治療に成功する最大の秘訣は、ステロイド軟膏を塗る心構えにあります。“できるだけやく炎症を完全にゼロにする、その後は、ゼロをキープしながらゆっくり減らす”が基本です。ステロイド軟膏をこわい薬と思っていると、どうしても塗り方が控えめになってしまいます。皮肉なことに、その結果、どんどん炎症が拡大してかえってたくさんの薬が必要になってしまうのです。

ステロイド軟膏は、皮膚局所だけによく効いて、全身の副作用がまずありませんので、上手に使えばとても有効で安全な薬です。その効果は、軟膏をぬる患者さん自身の理解度で大きく差が出ます。正しく上手に使ってもらうために、当院では、薬剤師、看護師とともに、指導に力を入れています。遠慮なくお尋ねください。



皆さん、こんにちは。今回は、細菌検査についてのお話をさせていただきます。ある種の細菌が検出されたり、地域で流行するとメディアでも大々的に取り上げられています。昨年は多剤耐性アシネトバクターがよく報道されましたが、さ・い・き・んでは、焼き肉屋さんのユツから「O-111」が検出された食中毒事件が印象深いと思います。

この「O-111」ですが、大腸菌の仲間です。「えっ、大腸菌って健康な人でもおなかの中にいるんじゃないか？」そうなんです。大腸菌自体は腸の中に生息していて、私たちが一日に排泄する糞便中には約  $10^{11}$  から  $10^{13}$  個含まれています。でも、ご安心ください。大腸菌のほとんどの種類は無害で、健康な方が普通に生活していても特に問題になることはありません。しかし、病原性大腸菌と呼ばれる種類の菌は違います！ O-111 のような病原性大腸菌が食べ物などを介して体内に入ると、腹痛や下痢、血便などの消化器症状や合併症を引き起こし死亡する例もあり、小児や高齢者では特に注意が必要です。



食中毒というと、レストランや旅館などの飲食店での食事が原因と思われがちですが、毎日食べている家庭の食事でも発生しており、発生する危険性がたくさん潜んでいます。食中毒の原因菌は他にもたくさんあり、予防のためには徹底した衛生管理が必要です。これから夏本番。食中毒流行の季節です。基本的にほとんどの菌は暖かいところが大好きで、どんどん育ち増殖し、逆に寒いのは苦手です。増殖を防ぐためにも、購入した生鮮食品は、家に帰ったらすぐに冷蔵(食品の種類によっては冷凍)しましょう。冷蔵庫内は多くの菌が最も育ちにくい温度であり、菌の増殖を最小限に抑えることができます。といっても、なるべく早く食べてあげてくださいね。

去る5月13日に、看護の日のイベントを行いました。

今年のテーマは「ゆいま〜る」です。これは沖縄の方言で「助け合いの心」を意味します。

看護の心、ケアの心、助け合いの心を育くめるように、さまざまなイベントを行いました。病院スタッフによるハンドベル、フラダンス、朗読会、手話歌、演奏会や、患者様・地域の方々の作品展、看護師・栄養士による健康相談、骨密度測定、肺年齢の測定などを行いました。

みなさんの心が和み、楽しんで頂けたようで、スタッフ一同も幸せな気持ちでいっぱいになりました。



6月2日に赤十字血液センターから献血車が来て、48名の方々にご協力をいただきました。

現在も血液が不足しています。4月1日より年齢の拡大として男性のみ17歳以上から400ml献血が可能に、血色素量(ヘモグロビン濃度)の基準値の引き上げなど条件が緩和されています。

あなたの勇気が誰かの元気にかかります。今後とも献血運動に一層のご協力をお願いします。

## 6月の教室案内

*カンガルー教室	●6月1日・15日・22日	午後1時半～	第1会議室
*喘息教室	●6月16日	午後2時～	第2会議室
*禁煙教室	●6月2日	午後3時45分～	医療情報コーナー